＜真のケア＞の土台にあるもの

～介護実習の男子学生がおしえてくれたこと～

茨城県立つくば特別支援学校（教諭/言語聴覚士）

Ａさんは重度の失語症の方です。私が言語聴覚士として、以前非常勤で関わっていた老人保健施設におられました。そして、その時にあった出来事と得られた教訓は、現在（いま）も私の心に刻まれており、福祉（教育）現場で働いている現在において、特に人と接する際の礎になっています。

失語症は脳梗塞等で引き起こされる後遺症で、言葉の出難さ等の言語症状が出てきます。重度になると、発せられる言葉はわずかで（＊Ａさんの場合は「あ・あ・あ‥‥」の音の羅列のみ)、言葉を聞いて理解することも難しくなり、コミュニケーションが非常に取り難くなります。書いてやりとりすることはもっと難しくなります。また、タイプにもよりますが、合わせて手足の麻痺を伴われる方が多いようです。なお失語症の方は、状況判断力については維持されており、重度の方でも状況から、一般的な意図を掴むことができる場合もあります。

そのＡさんが、病院での治療、訓練を経て老人保健施設へ入所されてきました。当初から笑顔はなく（いつも怒っているような感じでした)、また職員への応答は横暴で反抗的なことが度々でした。職員皆“とても気難しい方だなあ”と感じていました。

それから暫くして、当施設に介護の専門学校の学生たちが約１カ月の実習に来られました。介護実習は担当者を決めて行われます。一通りのオリエンテーションが終わり担当を決める際、あ

る男子学生が担当の希望を出してきました。「Aさんの担当をさせていただけませんか」。「いや、ちょっと難しいと思うよ」皆そういったのを憶えています。ただ、彼の決意は固く、半ば押し切られる形で担当になってもらいました。どうやら、彼のお婆様が失語症だったとのことで、思うところがあるようでした。その後、失語症の方に対する通常言われているコミュニケーションの取り方（非言語的コミュニケーションの活用等）を大まかに事前指導してから、いよいよAさんを担当してもらいました。

始まってから、それはもう一生懸命に、熱心に取り組んでくれました。なかでもコミュニケーションに対しては、きめ細かな対応が心に残っています。Aさんの大好きな『美空ひばり』さんの歌を一緒に歌ったり（＊失語症の方は自動的である“歌”が歌える場合もあります。また、メロディーの把握はできます)、御贔屓の『阪神タイガース』の昔の選手、シーンのプリントアウトしたものを見せたり、本当にいろいろと考え工夫されていました。動作や絵等も交え、一生懸命コミュニケーションを取ろうとされていました。何よりそばで見ていて、Aさんをずっとみつめる“温かい（そうな）”笑顔が印象的でした。しかし、Aさんの反応は変わりなく難しい顔をされたままです。彼の努力を知っているからこそ、個人的に少しAさんに腹立たしさを感じました。そして、実習最終の日をむかえます。

「大変だったでしょ」。私は、彼に尋ねてみました。「正直、大変でした」彼はそう答えた後、「でも、嬉しいところもありました」と続けました。「どういうこと？」と改めて聞くと、このように言いました。「Aさんが僕の言っていることを一生懸命聞いて下さっていることがわかったか

ら」。このとき、私はハッと気づかされました。確かに、Aさんはずっと難しい顔をされていたけれど、彼の顔、動作等をしっかりと、またいま思い返してみれば“温かい眼差し”で見つめてらっしゃたように思います。それに、顔つきもAさんらしい“男気”とも捉えられます。何より嫌でないからこそ、その場にいらっしゃった（彼との心のコミュニケーションを楽しんでらっしゃった）と推測できます。対して、自分は表面的にしかAさんを見ていない。深く、多角的に捉えようとしていない。福祉の職に就いた頃の気持ちはどこに行ってしまったのか‥‥と。彼が暗に示してくれた通り、“否定的なところからは何も生まれない”はずということが胸に突き刺さった。

深く、多角的にかつ肯定的に捉えていく（考えていく）ことで、もう一段上がったケア、＜真のケア＞がみえてくるように感じます。福祉的対人援助が始まるのではないかと考えます。私にとって、温かく、建設的に寄り添っていくこと（深く、多角的に肯定的に慮っていく姿勢）が＜真のケア＞、対人援助職の土台ということを改めて思い出させてくれた（心に刻まさせてくれた）大きな“出来事”でした。

学生たちが施設を去るとき、入所者、職員皆で見送りに出ました。Aさんも参加されました。彼の方を見つめ、いつもの“男気”の顔つきで「あ・あ・あ・あ・あ」と発せられていました。恐らく、「あ・り・が・と・う」と言われていたのだと思います。もう一つ‥‥、Aさんの目に光るものがありました。